

エジプトと日本における「国語認識」

——言文一致運動及び言語スタンダードをめぐる——

サーレ アーデル アミン

一九世紀後半に西洋との接触のもとで行われた、日本とエジプトの「言文一致運動」は、近代文学及び「国語認識」を創出した重要な要素として位置づけられてきた。

だが、文字のある言語は必ず二つの面を含んでいる。

一つは話しことばであり、もう一つは書きことばである。この両面が完全に一致することはない。文字の発明以来、文法が規範化・固定化されたため、文は文法の規範に従って作成されることになる。人間はこの言語変種を使う際、ほとんどの場合、改まったスタイルを好む。

一方、話しことばは一回限りの物理的な音声からなっており、柔軟性を持ち、唯一の特定の言語変種を持っているのではない。これを前提にするならば、書きことばと話しことばは一致しない。したがって、近代の日本の

言語改革を文字どおりの「言文一致」として規定するのは、不正確な把握であるように思われる。

日本の言文一致運動に関する研究は、国語学・国文学の分野において、すでに蓄積がある。(山本正秀や森岡健一など) 一方、アラビア語圏において「言文一致」にあたる正確な概念は見あたらない、しかし一応日本の従来の「文語(漢文も含む)」は正則アラビア語(Fusha: フスハー)に、話しことばは大衆(Gamii)に由来する俗語(Ganyia: アミーヤ)に相当する言語変種、と考えればよいであろう。アミーヤの推進運動は、日本の言文一致運動と同様「話しことばをそのまま写した書きことばの使用」を意味し、一九世紀末まで全く同じコンセプトで認識されつづけた。本稿では、エジプトのアミーヤの推進運動を、日本にお

ける言文一致運動に相当する言語革命と位置づける。前者の例から帰結した「中間言語（従来の文語としてのフスハーと素朴な俗語、アミーヤを折衷しつつ、両者を媒介しうる言語変種）」という概念を通して、日本の「言文一致体」を、新しいアプローチで分析し、従来の研究とは異なった見解を見出したい。

さて、日本とエジプトにおける言文一致運動のプロセスは、時代的に三つの時期に区分できる。最初の時期は、一九世紀後半に始まる外国人の俗語の文法書や辞書の刊行と、それに続く、啓蒙思想家による印刷物での俗語の使用を中心とする、言文一致運動の開始の時期であり、これは両国における言語ナシヨナリズムの前夜と考えられる。次の時期は、一九一九年に始まる「エジプト化」イデオロギー、日本の一八九〇年以降の「国粹主義」の発生から、第二次世界大戦に至るまでの時期で、「中間言語」が成立する。最後の時期では、戦後の両国における国語認識に基づいて「言語スタンダード」中間言語」が公認されるか否かが、国民国家の成立にあたって決定的な条件となる。

1 言語ナシヨナリズムの前夜

1-1 俗語の研究の始まり

近代化以前のエジプトにおいて、イスラム教と結びついたフスハーは、圧倒的な権威を持っていた。しかし、一八八二年以降、宗主国たるイギリスによって、英語が教育や官僚などの公用語として、エジプトに強制された。エジプトの知識人は英語に対して、聖なる正則アラビア語をそのまま武器として抵抗しようとしたのではなく、多様な障害を越えてフスハーに大改革を起こし始めた。革新家は話しことばを基にする言文一致体の実現化を訴え、アミーヤを上昇させ、「民衆語」を見出した。

この時期には、エジプト社会の文明の遅滞の原因として、フスハーの固定性、複雑性、原始性がしばしば挙げられた。そうした考えを持つ人々は、アミーヤをフスハーに積極的に置き換えようとした。そのために、啓蒙家はアミーヤに規範性・簡潔性・柔軟性を与え、非識字者のための啓蒙及び文学と教育の手段として採用した。

近代化以前のアミーヤは全くの俗語として存在し、言語学的にも全く関心を持たれてこなかった。一九世紀の

後半までにエジプト人により書かれたアミーヤの文法書は、わずかしかない。これらの文法書が編まれた目的は、外国人のためのエジプトの日常会話の学習のためであった。

一八八〇年代以降、エジプトに長いこと住み、イギリスの植民地時代の政府の要職についた外国人によって、アミーヤに積極的な価値を認めた研究書が出版され始めた。これらの書は、地域的なアラビア語方言に対する真摯な研究の初めての試みと考えられている。たとえば、一八八〇年に、ドイツ人シュピッタは、ドイツ語の『エジプトの俗語の文法規則』(Schittat, 1880)を出版した。彼は、アミーヤが自立した言語として教育・文化・文学などの活発な分野で使用されることによって、エジプトの政治的崩壊や社会的後進性に対する有益な対策となると考えた。同書の序文で、彼は「エジプトの二言語併用状況では、民衆文化というものは考えられない。初等教育において、人は、フスハーのような難しい言語では、知識の半分も得ることはできない；古くて複雑な表記方法に責任がある。」と述べた。それ以来、アミーヤの推進を支える数多くの文法書が発行された。イギリス人ウィルモ

アは(Wilmore, 1903)『エジプトの口語アラビア語』を発行した。彼もアミーヤを弁護し、それが書きことばと文学の言語として採用されることが重要であり、少なくとも宗教性を持たない市民生活において、アミーヤを国の単一言語として受け入れることを主張した。これらの文法書は、フスハーとアミーヤの両変種の格差を認識させ、両者の社会的な対立を刺激した。純粹古典学者から見捨てられたアミーヤを言語学的に研究することは、言語的な革命であった。これらの文法書は、次の時代に盛んに行われたアミーヤ推進運動と、直接的にも間接的にも、深く結びついていた。これらの書をきっかけに、「言文一致運動」「民衆文学」「ラテン文字化運動」「フスハー廃止論」などの社会的な認識が発生したのである。

フスハー廃止を訴え、言文一致化を熱心に推進した改革派の代表者としてイギリス人ウィルコックスは、一八九二年一月に、イスラム教の代表雑誌『アズハル』誌の編集を担当し始め、同誌を舞台にして、「フスハー廃止・アミーヤ採用論」を訴え続けた。彼は、正則アラビア語フスハーで書き続ける人は、学問を一握りの人たちにのみ限ってしまうため、人々の間に無知を広めたがっ

ているのだと明言し、保守派を批判した。そして、書きことばとして、フスハーに代わってアミーヤを採用した。その理由として彼は「科学を広め、エジプト人たちを啓蒙したい。エジプト人が自らの思考で使用されている生きた言語で話すことを促す一文で、この雑誌をはじめ」(アズハル誌十月号)たと述べている。彼はエジプトの近代的な発展の扉を開くため、アミーヤによる教育の一般化を提案した。

さて、日本の幕末から明治初期にかけて、フスハー廃止論にあたる漢語廃止論をとなえる人々が存在した。一部の知識人は、西洋列強の圧倒的な国力に衝撃を受け、西洋的な「言語革命」が、実質的に「言文一致体」であり、それが国民国家の成立及び国力の増強の条件であると認識した。その「言語観念」を背景とした近代日本の言語改革の出発点と考えられるのが、慶応二(一八六六)年、幕府開成所の役人の前島米輔が、將軍徳川慶喜に奉った建白書「漢字御廃止之議」(前島、一五三―一五四頁)である。彼の「漢字廃止」に関して注目すべきことは、日本の国力を高めて西洋諸国の国力においつくためには、漢字廃止に伴い言文一致の思想が芽生えていることが必

要だとした点である。

国文を定め文典を制するに於ても、必ず古文に復し「ハベル」「ケルカナ」を用ふる儀には無御座、今日普通通の「ツカマツル」「ゴザル」の言語を用ひ、之に一定の法則を置くの謂ひに御座候、言語は時代に就て変転するは中外皆然るかと奉存候、但口舌にすれば談話となり、筆書にすれば文章となり、口談筆記の両般の趣を異にせざる様には仕度事に奉存候(前島、一五八頁)

ところで、前島が「文典」の制定を説いているように、明治以前においては、話しことばの文法の研究は、エジプトと同様にほとんどなされることはなかった。明治三〇年頃までは、日本人よりも西洋人の方が研究に熱心であった。ただし、西洋人の文法書は、西洋語の文法論の日本語のあてはめにすぎないことが多く、後の日本人の研究者は肯定的に評価していない(例えば、Aston, 1871)。日本人による最初の体系的な口語文法書として評価されているのは、明治五年の馬場辰猪の *Elementary Grammar of Japanese Language* であるが、この本は英語で書かれ、ロンドンで出版されたため、影響がなかっただろうが、馬場が話しことばの文法書を書いた意味は考察する

に値する。馬場(彼についてイ・ヨンスク、一九九〇が詳しく論じている。

筆者は、当論文に示唆を受けた。)がこの本を出版した目的は、森有礼の英語採用論に反論するためであった。馬場は、英領植民地であったインドの例を引き、日本への英語の導入が、言語的な不統一を生じさせ、結局は国民間の階層的な分裂を生じさせる、と述べた。さらに、彼は日本の近代化にあたってむしろ必要なのは、統一「言語」であると述べ、日本の話し言葉に基づく日本人の団結を主張した。彼が文法書を書かなければならなかったのは、話しことばが社会的承認を得るために、文法を備えていることが大きな意味を持っていたからである。

しかし、日本語の話しことばの価値の尊重という馬場の思想は、まさに彼自身の言語的实践において裏切られている。幕末になると、西洋文化の受け入れのため、西洋の言語、とりわけ英語が学ばれた。この状況の中で馬場が英語による日本語の口語の文法書の出版したという事実は、当時の言語状況の複雑さを象徴している。

1-2 印刷物にみられる「話しことば」の使用

エジプトでは、シュピッタらのアミーヤの推奨運動が

始まったのとはほぼ同時期の一八八〇年頃には、アミーヤによる著作物及び新聞の記事が、たくさんみられようになった。西洋人のアミーヤ推奨運動を真剣に受けとめたエジプト人の改革派は、啓蒙と文化的育成の手段としてのアミーヤを使用する大衆的マスメディアを支持しはじめた。エジプト解放と社会改革をめざし、一八七九年に始まったエジプトの「オラービー運動」のリーダー達も、大衆的な雑誌や新聞などで自分達の有力な手段であるアミーヤを書きことばとして使い、アミーヤが「大衆」のことばであることが認識され始めた。アミーヤが、文化的・政治的な領域での論述に最初に使われたのは、一八七八年から発行された『眼鏡おじさん』誌であった。この雑誌では、ヤアコーブ・サンヌーが、エジプトとヨーロッパ諸国の事情を、アミーヤで読者に紹介した。当時の代表的作家でオラービー運動のリーダーとして知られるナディームも、『眼鏡おじさん』誌の言語方針を支持した。さらにナディームは、アミーヤによる『笑い話泣き話』誌を一八八一年に発行した。彼は民衆詩・劇曲・新聞記事をアミーヤで書くことによって、アミーヤが書きことばとして適切であることを証明した。彼がフスバ

一支持の立場であったにもかかわらず、アミーヤを書きことばとして利用した。それが植民地支配下にある一般庶民の覚醒に必要なことからである。ナディームの社会改革的な記事は、実際に全国の村落まで浸透した。また、革命派は、一般庶民の覚醒や文化的育成、精神的統一に役立つと考え、この方向を強く支持した。

『笑い話泣き話』誌に次いで、一八八一年に登場した『ムクタタフ』という学術雑誌も、まだそれほど普及していなかったアミーヤによる学術的な記述を進めようとした。しかし、ナディームは、オラービー運動のスポークスマンに任命されたとき、アミーヤで書くのをやめ、再びフスハーのみで書き始めた。オラービー運動家は、一八八一年一〇月二三日の一九号から、『笑い話泣き話』に換えて、フスハーによる『アル・タイフ』紙をウンマの新聞とする、という公式の決定をした。というのは、オラービー運動家は、一八八〇年代に実行された宗主国イギリスによる英語化政策に抵抗するため、アミーヤを新聞の論述などに使うのを迷っていたのである。

エジプトの言文一致体を確立したのは、革命家によって大衆向けに発行された、『ウスターズ』紙である。同

紙は基本的にはフスハーによる雑誌であったが、アミーヤの部門も設けられた。この部門は、一般人向けにアラビア文字を用いて表記され、言文一致の実験現場であった。この部門は、号にもよるがだいたい雑誌全体の三割ほどを占め、多いときには半分以上がアミーヤ部門で占められたこともあった。この雑誌の方針は、アミーヤ部門によって、アミーヤしか読み書きのできない非識字者を団結させることであった。その目標を、ナディームは次のように説明している。

東洋の王たちが科学振興の努力を怠り、また、内外紛争に明け暮れていたために非識字が蔓延したことを見たときに、我々は啓蒙的な雑誌を発行することにした。この雑誌には、聞くことさえいやがる非識字者が書物を読むのを好きにさせるために、アミーヤによる短い部門も含まれた。(ウスターズ、一九八二、一月号)

このように、啓蒙的政治的な記事などに、アミーヤを文字にして使うという・試みは前例がなかった。文体は簡素化されており、フスハーとはかなり違った語彙や英語式の語順などを使う。

編集者の言語観は「完全な言語とは、民族の知性の持

ち主達によって、特殊と一般との間で使われている生きた言語である。そして「雑談言語」とは、動物が言語なしにすませているような、どうでも良い用事にしか使われない死んだ言語である」(ウスターズ、一八九三、六月号)というものであった。

『ウスターズ』紙に現れたアミーヤは、ナディームの望んだように、社会の全ての階層が理解できる、簡略化したフスハーでもあった。Uḡḡaḡḡaḡḡa (ウスターズ、一八九三、十月号)という記事の中でナディームは、アミーヤの部門を『ウスターズ』紙に書き続けることを、一般民衆の代表者と約束した。(この記事自体が「アミーヤ体」で書かれている。なお、原文はアラビア文字で)

—? imi-na maa ni?dar nifham il-kalaam il-ḡarabi in-nahwi la-?innu kalaam saḡb ḡa-s-sittat wi-naas ?mthalna....

—lyikum ḡalaya imni axaajib-kum bi-kalaam yiḡ-hamu etiḡiḡ ?s-ughayyar wi-r-raagiḡ w-l-l-mara min ḡheer taḡb wala yiḡhtaḡ li-talsyir wala-l-shex yiḡ-ullukum ḡala maḡnaa... wi ?innama raḡʔeet baḡḡD il-mushtarikim fi-il-?ustaadh?arsal muḡawra bi-l-

Kalaam il-Baladi... (ウスターズ、一八九三、十月号)

しかし、フスハーの支持者の圧力、英語政策の実行、ウィルコックスのアミーヤの推奨などの間で、ナディームは『ウスターズ』紙でのアミーヤ部門の継続について流動的であった。『ウスターズ』紙に執筆していた人々は、アミーヤの重要性を認めつつも、教育言語としてアミーヤをフスハーにかえて用いるならば、フスハーを死語にすることになると考えた。一八九二年一月一〇日号から、『ウスターズ』紙では「アミーヤ部門」を一時取りやめたこともあったが、読者がアミーヤの使用を強く要求したため、アミーヤ部門は復活した。『ウスターズ』紙の「読者部門」には、一般読者たちから、アミーヤ部門をやめてしまったら、啓蒙的な論述から自分たちは切り離されてしまう、と訴える多くの手紙が届いた。同紙の一八九二年の一月号には、以下の投書が載せられている。

我々読者は男女間で異なるものの、どの階層も文盲が殆どを占めています。…知識人の著作家達しか政治新聞や学術誌に参加できず、みんな自分だけ、或いは同じ階層の人達の間だけで新聞を読んでしまいます。

女達や庶民は、生活行動や理性を教えてくれる人を必要としています。…あなた達の新聞『ウスターズ』紙が出てその一部をアミーヤで書いた時、彼らの多数が、あなた達の新聞を手に入れます。庶民が、字も読めないのに、それを買います。…老若男女の間で、学者と無知な者との間で、利益が共通のものとなったのです。大衆にとってアミーヤが、いかに必要で不可欠であったかの重要な証言とみなされる。だが、一方で、投稿者の言語観とは、条件付きのアミーヤの使用であった。当時のカイロ市民の代表団の結論は、教育、学術的書物における「アミーヤの使用は、決して認められない」ということだった。

一九世紀末のエジプトの啓蒙家の一部は、英語化政策に反発してアミーヤを用いるか、フスハーを用いるかで迷い結局、教養人たちは、正則アラビア語の支持者と口語アラビア語の支持者に分断され、一八九〇年代に初めて公的に大規模に論議された。『ウスターズ』に代表されるようなアミーヤの使用の目的は「各人がその人生で理解できる限り、吸収できる限りのものを得るため、教育と思想を諸階層の間に浸透させる」ことであり、さら

に教育レベルの差の縮小と、教育と思考の上昇を目指して人々に直接書く方法による社会的な無知層の撲滅とであった。『ウスターズ』紙にみられるアミーヤの使用は流動的であり一貫性をもたなかったと考えられ、エジプト固有の「国語」を見出すという試みではなかった。だが、それは、後にエジプトの言語ナショナリズムを発生させたダイナマイトだったに違いない。言文一致運動の初体験とは、近代文学を担う「民衆語」の下準備でもあった。

一方、日本においては、啓蒙思想家は、西洋文明の取り入れに熱心であり、西洋の言語を身に付けていたが、同時に漢文にも習熟していた。当時の文章の領域で主流だった文体は、漢文訓読体であった。漢字のみが使用され、文法も古代中国語に由来する純粋な漢文は、明治のごく初期には公的文書に用いられたが、それ以降、急速に衰えていた。それに対して、日本語の助詞を挿入し、語順を日本語化した漢文訓読体が主流となってきた。その背景には、いまだ漢文の威信の高さが存続していたという意識的な要因と、高度な内容を担い得る文体をほかに見い出しえなかったという実際的な理由とが存在して

いた。当時の知識人が受けた教育の言語は、漢文もしくは漢文訓読体であったからである。

啓蒙思想家の代表的人物として福沢諭吉は、言語実践の面でも革新的であった。慶応二(一八六六)年の『西洋事情』では、文章について、以下のように述べている。

洋書ヲ譯スルニ唯華藻文雅ニ注意スルハ大ニ翻譯ノ趣意ニ戻レリ乃チ此編文章ノ體裁ヲ飾ラス勉メテ俗語ヲ用ヒタルモ只達意ヲ以テ主トスルカ為メナリ然ルニ今之ヲ某先生ニ謀ルモ徒ニ難字ヲ用ヒ読者ヲシテ困却セシムルノ外決シテ他事ナカルヘシ加之漢儒者流カ頑僻固陋ノ鄙見ヲ以テ原書ノ情實ヲ誤認ムルモ亦圖ル可ラス(福沢、一八六六、二一—三丁)

福沢はあるエピソードを紹介している。友人が原語を指して、あてはめるといふ意味の単語だが、どういう訳語をあてたらよいか困っている、と相談したところ、福沢は、そのまま「あてはめると訳したらいい、と教えただという。俗語が訳語として使われていなかった当時の状況と福沢の俗語の使用への積極性がわかる(福沢、一八九七、また、前述した前島も、明治六(一八七三)年に、『まいにち ひらかな しんぶんし』という、平仮名の

みで書いた新聞を発行している。文体は、語法は文語体であったが、語彙は日常的な語彙に近いものを採用していた。

当時の啓蒙思想家のねらいは、エジプト人の革新家と同様に大衆に知識を与え、啓蒙することにあつた。そのために、できるだけ一般人が理解しやすい「言語変種」をつくる必要があつたのである。彼らにおいて、すでに漢文の簡略化と話しことばの語彙の書きことばへの採り入れが生じている。これは、後の言文一致体の基礎となつたわけである。とはいえ、この時期の言語的な実践は、後の時期と比べてみると、明確な言文一致とは言えない。彼らによる話しことばの文体の採用は、その読者を限定している。彼らは、大衆のためには話しことばを取り入れた文体を使用しつつも、学術的な文章には、漢文訓読体を用いるという、機能的な分化を承認していた。したがって、彼らによる話しことばの採用は、一貫したものと見なすことはできない。この点は、エジプトの革新家と等しい。日本とエジプトのいずれにおいても、言文一致の最初の段階では、心理的な抵抗感やイデオロギー的な理由で、話しことばをそのまま、文学や教育の言語

として用いることは不適当だと思われた。未熟な言文一致体が、その後さらに改良されるべき理由がそこにあった。

2 「中間言語」という思想

2・1 エジプトの実例より

エジプトにおける西洋的なナシヨナリズム意識は、一八八二年に始まったイギリスによる植民地化政策への反動によって生まれた。ナシヨナリズムが最盛期を迎えたのは、第一次大戦後の「一九一九年革命」によって発生した「エジプト化」イデオロギーの時期であった。この運動は、エジプトの地理的国境線の内側にエジプト人の特徴的な性格及び生活様式というものを考え、そしてエジプトの未来への夢とその実現に向けた努力を主張した。それを背景に、文学やすべての芸術を「エジプト化」するというスローガンが語られた。それは「国語認識」にも適用された。革新家らは、アラビア語を「エジプト化」する形でエジプト人固有の「国語」を考えたのである。それ以前には、アラビア語世界では「国語」や「民族」や「国家語」などの世俗的な概念は、未だ誕生

してはいなかった。エジプトの「民衆文学」という考えに固執する文学者や若手の評論家は、これを圧倒的に支持した。彼らは、「民衆文学」を形成する前提として、まず第一にアミーヤの「国語」化を成功させなければならなかったのである。そしてその方法として彼らは自らの著作に簡略化されたフスハーとアミーヤを混合させて使ったり、上昇させたアミーヤそのものを使ったりした。言語の「エジプト化」イデオロギーの持ち主は、どのような言語改革を提起したのであるうか？ 以下に革新家の代表論文をめぐって提起された「言語モデルⅡ中間言語」を見てみよう。

「エジプト化（アラビア語でエジプトは، مصرといひ、ヨシヨシは、エジプト人のことをさす）」イデオロギーの実現化のために様々な理論が引き起こされた。その中で、運動の先頭に立ったのは、ルトファイーという啓蒙思想家であった。ルトファイーは、エジプトの近代ナシヨナリズムを初めて呼びかけたことで良く知られ、アラビア語の「エジプト化」を押し進めた革命家であった。彼の「言語理論」は、政治・社会・教育的「エジプト化」という基本思想と並行して登場した。

ルトフィーは、一九一三年に『アッシュアリダー』紙に七つの論文を発表し、その中で自ら呼びかけたアラビア語の「エジプト化(Tamsyir al-lughah)」思想を弁護し、人々の支持を求めた。この思想の基本は、二つの基盤のもとに成り立っている。一つは、アミーヤの語彙を昇格させる、つまり日常会話において使用されている外来語の名詞をアラビア語として承認することである。例えば、*ʔotomoobyii* (車) *biskitia* (オートバイ) *jak-itta* (ジャケット) *banialoon* (ズボン) *gazma* (靴) *mooda* (流行) 等々。

もう一つは、フスハーとアミーヤの両者を和合させることである。彼にとって、アラビア語の「エジプト化」とは、文語と口語との間の「和合」を意味した。彼の七つの論文における言語改革の要点は、日常会話の新しい名称を引き出して、できるだけアラビア語のリズムに合致させ、新しいものに名称のない場合、辞書や学術書から単語を補充することであった。

近代文学を言語的かつ内容的に「エジプト化」するという運動に参加したA・ハークの名を特に挙げなければならない。彼は『民族文学』の中で、ここで文学作品は

特殊な教養人だけでなく一般大衆にも理解できる言語を使わなければならないことを主張した。彼は、「民族語」という観念を、最も早い段階でアラビア語世界にもたらし、これを「エジプト語」と呼び、これの実現が国民国家の条件であるとした。ハークによれば、アラビア語に最も欠けているのは、民主化と自由である。ヨーロッパでは、ラテン語から多くの言語が発生し、その後話しことばの多様な変種から標準語をつくり、近代「国家語」が成立した。ところがアラビア語はその逆の方向に進んだ。彼によれば、その要因は「宗教」と「アラブ文学」にある。

「私たちが…言語発展の決まりに従ってゆくとするならば、私たちが使用している二つの言語が一つの言語になるのである。しかしこの夢は、実現しがたい。…彼ら(純粹派)は、一方で宗教的な熱狂、他方でアラビア語とアラブ文学の復活のため、自分のエジプト的な民族性を犠牲にしている。我々よりも、アラブ人の方を優先し、彼ら自身の努力を払っている。これに私は驚き、疑問を持った。彼らは、アラブ人なのだろうか、エジプト人なのだろうか?」(Haq, 1925, p. 15)

ハークがいうエジプトの「民族語」は、アラビア語の最も丁寧でやさしく生活と使用に対応できる言語変種である。さらに、これは多数派の言語であるのに対し、フスハーは少数派のみに使用されている、とハークは強調した。

言語学者・文学者ムーサは、「フスハー廃止論」と「アミーヤ（中間言語）による社会改革」を論じ、エジプト人の進歩に結び付けた。彼は、言語が社会発展と深く結びついているため、エジプト人の利益はアミーヤにあると決断した。生きた言語は社会の発展とともに発展していくという観点から、一つの社会には「二言語併用」状況があつてはいけなさと警告した。なぜならば、その結果「フスハーは社会から孤立し、あたかも、聖職者が、礼拝所で唱えるような言語となり、社会と言語との間の哲学的な断絶がおこり、言語の発展が妨げられる」(Musan, 1945, p. 43-44) からである。

ムサーによるアミーヤの採用の理由は、以下のようなものである。

生きた言語は、社会の神経系統、あるいは、個人が相互に理解し合うための電話網である……アラビア語の

フスハーには、民主主義や自動車、テレビなどといった近代文明要素がなく、コランとアラブの伝統のみが存在していた。封建時代の言語であるから、その下では社会的平等も民主主義も女性の地位の向上も生まれるはずがない(Musan, *Ibid.*, 47-50)

今日、言語と社会との間の相互作用は健康的でなく、両者の間には断絶があるため、病気が発生した。その病気とは、あまたの科学や芸術に対する無知のことであると彼が論じたように(Musan, *Ibid.*, 28-29)。フスハーと社会との間の均衡が取れていないのである。この病気の最良の治療は、フスハーの放棄と社会の現代的要求に答えられる言語の採用である。ムサーは、「民衆と文学の断絶を超えるための『民衆語』をつくり、ラテン文字を採用することを論じた。彼にとって、新しい文学は、科学と文明の方向、すなわち西洋に向かわなければならないのであつた。

西洋的な文学は、社会的人類的な問題を扱うため、文学家は民衆に向かって民衆語で書いている。このため、ムーサのいう革新的文学は、可能な民衆語で書き、そして民衆の課題やその文学の研究と関連していなければならない

らない。彼の論じた「民衆語」は、現に話されている「俗語」アミーヤ」ではない。なぜならば、アミーヤはそのまま表記するのに不十分であり、彼の考える民衆語とは、民衆が理解できる簡略化した言語でなければならぬからだ。またこれは、西洋の言語の要素を取り入れたアラビア語である。これは盛んに議論されてきた「中間言語論」の条件とも言える。そして、彼はこれを自らの論文に使い、文学の革新という名のもとで民衆語の成立に大きな役割を果たした。

改革派の内、アラビア語の伝統的な文法構造の見直しと基礎文法の再分類を新しい科学的な議論の下に強調したのは、S・ホサリーであった。フスハーに対抗する革新的な世代を代表した彼は、「中間言語」の創造を目標とした。彼は、他の改革派と同様にエジプトの公立学校の当時の教科書『アラビア語文法基礎』を全面的に批判した。彼は、この教科書の内容も方法も「知性と論理を否定している」と主張した。また、彼は西洋の言語学の方法論とその論理がアラビア語文法に応用されること望み、アラビア語の文法のための新構造を提案した。

伝統的文法による詞と動詞と小辞という、単語の古

い分類を取り消し、それに加えて、西洋古典的方式を採用しようとした。旧概念としての名称を代名詞と動名詞と能動分詞と受動分詞から分離し、これらを独立的な品詞、すなわち形容詞と代名詞とに分けた。そして、それらを、広い意味での動詞の仲間とした。動詞の三つの分類(過去形、現在形、命令形)に、第四の類、即ち未来形をつけ加える。(Chart. 1968, p. 111-113)

この案は、伝統文法の基本原理とは大きく異っており、動詞―主語という語順しか知らないフスハーにおいて、主語と動詞の位置の交代を可能にした。

ホサリーらの改革派が目指した、伝統文法の西洋の近代言語への接近は、近代文化と言語の内的論理との調和をもたらしたものである。彼は晩年の一九五五年、言語と文法を分けて考えた。簡略化を必要としたのは文法だけではなく、言語そのものも簡略化されなければならない。これを実現するには、フスハー語と諸方言とを接近させなければならないという。

二〇世紀半ば、応用言語学の分野で二言語併用の研究が積極的なアプローチを始め、研究者の注目を集めるようになった。ホサリーなどの言語学者たちは、教養人の

間での、完全に文学言語ではないが、完全なアミーヤでもない、共通の話しことばを發展させる必要があると呼びかけた。この応用言語学的な試みを、初めて行ったのは、一九五五年のA・フィレハーであった。彼は、実際に教養層の殆どに使用されているこの中間言語を、文法的音韻的に固定することを提案した。彼は特に、音声的な形式に重点を置き、「ラテン字化」推進派の一員となつた。

アミーヤとフスハーの最も重要な違いであり、また、フスハーの最も困難な問題は、「イウラーブ（語尾の格変化）」の文法学習であった。そのためアラビア語の教育は、特殊な階層や教養人でも完全にマスター出来ないほどであった。アフマド・アミンは「イウラーブ」を省き、かつアミーヤの俗っぽさを除いた上で、「両変種を接近させたアラビア語を創造する必要がある」と説いた。そして、この中間言語は、アミーヤとフスハーの間の橋渡しとなり、教育の普及に貢献し、文学者はすべての人に文学を伝えることができる、と考えた。フスハーに関しては、特殊な言語レベルなので「専門家が書き、古典書物などを読み解くための、特殊な階層の言語なのであ

る」(Amin, 1964, p. 7)と彼は述べた。

この中間言語は、一方ではその民主性と民衆性及び現代の日常生活レベルでの微妙な感情を差し、人情の機微に触れる表現力、その文法的な安定性を簡易さ、他方で「フスハー語」の格調の高さ、語彙の豊かさや音韻と、形態論と統語論というアラビア語規則を生かして、エジプトにおいて「言文一致度」の高い共通の「民衆語」となりうる可能性があるとするで、一九四〇年代から考えられた。アミーヤとフスハーの両方の利点を生かして、両者の間の中間言語が新しく生み出されてきた。フスハーの階層と、諸アミーヤの階層とが、同等に理解できるこの「媒介言語」は、共通の特徴や性質をもち、特定の形を固定化した言語法則を備えさせ、一つの言語共同体での、共通語としての資格を持つにいたった。またこれは、一九五〇・六〇年代以降にアルハキームが述べた「第三言語」と同じ言語体系と解釈してよいであろう。(これの分析は、Saleh Adel Amin, 1997)

アラビア語の「エジプト化」の試みは、水の泡とはならなかった。これらの運動は、フスハーを死語にするにはいたらなかったが、正則アラビア語に多大な改変、そ

して革新をもたらした。実際には、革新家は、アミーヤとフスハーを媒介する「言語変種」を提案したのである。この新しい言語変種とは、ムーサの文法分類に見られる西洋型の言語であり、後に成立するエジプトの「民衆文学」を担う中間言語である。その新しい文学において、「公式文学」に見られなかった戯曲、小説、民衆詩などの西洋的な文学が生まれた。またこれは、アミーヤの推進運動下で「民衆・民族」の文学と呼ばれ、それをかかえる前提は、彼らの言葉でいえば、「ナシヨナリスティックな言語」の形成である。換言すれば、正当化され、エジプト化されたこの現代アラビア語は、古びた複雑な言語を簡略化して、使用可能な語彙を大衆化する、という当時の推進運動の言語改革および言語の方向性をもっていた。

エジプトの学者・思想家にみられた国語認識に基づいて筆者の提起した「中間言語」という思想を、以下に整理しておこう。

中間言語とは、従来の文語としてのフスハーと素朴な俗語「アミーヤ」を折衷しつつ、両者を媒介しうる言語変種をさす。これは、従来の文語よりも簡易化され、俗語

よりも洗練されている。また、もう一つの特徴は、語彙や語順に西洋言語の要素を取り込んだことである。この点で、中間言語は、近代文明を取り入れる枠組みとしてはるかに適当である。この言語改革の本質に関して、結論を先取りして言えば、「俗語」は言語の主役となり、従来の文語もフスハーと同様に補助役となった。

2・2 日本の「言文一致」理念の再検討

この中間言語という仮説は、戦前までのエジプトと共通した言語改革が行われた近代日本にも適用できる。日本における明治二〇年代後半から明治四〇年前半は、言文一致体の確立の時期といえる。この時期の特徴は、言文一致体の改良の必要性が認識され、実態が変容していくことにある。

明治二〇年代後半には、とりわけ日清戦争(一八九四―五年)などによる日本型のナシヨナリズムの高揚を背景に、言文一致運動は国語問題と政治的にむすびついていく。

上田万年によれば、本来の国語とは言文一致体でなければならぬ。

国語とは之を口に語り、之を耳に聞くときも、之を字に写し、之を目もて読むときも共に同一の意味を有するものにして、かの文章上には使用すれども、談話上には毫も実用をなさず、談話上には使用すれども、文章上には未だ其の資格を公認せられざるが如き、国語の事にはあらざるなり。更にいふかふれば、言文一途の精神を維持し居る国語の事をいふなり。(上田、一九〇二「内地雜居後に於ける語学問題」)

上田のねらいは、国語を成立させるにあたって、話しことばがその主役となるべきだという点にあった。同時に、上田によれば、言文一致体のもとなるのは、下層階級の下品なことばではなく、東京の中流社会の教育を受けた人のことばであった。すなわち、言文一致体が成立は、話しことばを統一する規範となる標準語をとまなうべきだと考えられたのである。

上田を中心として、国語の規範を議論する最初の国家機関としての国語調査委員会の設置や、小学校教科書の言文一致体の採用などの施策がとられ、言文一致体が国家の国語政策にむすびつく。国語調査委員会の調査方針には次の項目が含まれた。

(二) 文章ハ言文一致體ヲ採用スルコト、シ是ニ關スル調査ヲ爲スコト

(四) 方言ヲ調査シテ標準語ヲ選定スルコト(文部省一九〇二)

国語調査委員会の補助委員で、上田万年の弟子であった保科孝一は、(二)の言文一致体の調査は、(四)の標準語が定まれば自然に定まる、という見解を述べている。保科一九〇二。即ち、諸方言の中から選び出され制定された標準語によって話しことばを統一すれば、その標準語を写したものが言文一致体である。その言文一致体によって多様な文体を統一する。したがって、言文一致とは、国語の統一にはかならない、というわけである。

しかし、この時期に確立された「言文一致」体は決して、従来の話すままに書くという発想と実践が反省されたものではなく、従って言文一致体の改良が課題となってくる。「下降的言文一致：は失敗せるものゝ如し。今後執るべき道は上昇的言文一致なるべし。」(言文一致につき、一九八七)

要するに、ここできざされている「言文一致」は、見下された俗語をそのまま書きことばとするのではなく、

従来の「文語」の要素もこの新しい「言語変種」に取り入れた、いわゆる「上昇的言文一致」なのである。これは、エジプトの革新家によって見い出された「中間言語」と原理的によく似ている。換言すれば、従来の文語を簡略化する一方で、話しことばの要素を洗練させ上昇させた、両者の「中間」に位置する変種こそが必要であることが明確に意識されていたのである。一方、小説においては、言文一致体の確立以前に、大きな勢力をもっていたのは、「雅俗折衷体」といわれる文体であった。雅俗折衷体は、会話文は言文一致体、地の文は文語体である。ここで大事なことは、文語文の存在こそが、初期の言文一致体の未熟さを乗り越えた、中間言語の成立する前提であったということである。実際、文語文には語法の一部をおきかえれば、言文一致体として通用するものもあった。島村は、このような指摘をうらづけた。

雅俗折衷とは、精しく言へば雅文と俗言とを適宜に混用したるものなり、言文一致とは、之亦た俗言と雅文とを合せんとせるものなり、故に雅俗といひ言文といふに於ては、名は異なるも実は一なり、…一は雅文を臺にして俗言を之に点じ、一は俗言を臺にして雅文

を之れに点ず…両者ともに言文折衷といひて即ち足れり(島村、一八九八、八四四―四五頁)

しかし、島村は両者の違いをも、指摘している(島村、一八九八、八四六頁)。この指摘によると、文語を言文一致体から実質的に区分するものは、「なり」「けり」という歴史の意味をおびた型であり、この型が文章の自由を束縛しているということである。しかし、非言文一致論者が、「なり」「けり」を使用せざるをえなかった理由も存在していた。言文一致体に対する批判として、話しことばをそのまま写した場合には、「です」「ございます」「だ」などの文末辞が待遇関係を表示してしまい、客観的で自由な描写に不向きであるという意見があった。逆に言えば、「なり」「けり」は、抱月が指摘するように、日常生活に使われないからこそ、文末辞に適していたのである。しかし、「なり」「けり」は、歴史的な型によって、文章を束縛するという欠点をもっていた。したがって、言文一致体を確立するには、「歴史の意味」を帯びず、かつ話しことばで使われていない文末辞が必要だったのである。それが、現代の日本語の書きことばで必ずといっていいほど用いられる「である」である。

島村によれば、(島村一九〇二)「である」が翻訳から生じたことは、言文一致体が、日本に存在した話しことばをそのまま写した文体ではなく、書きことば、そして外国語との関係のもとに成立したことを象徴している。「である」は、話しことばに使われなため待遇関係を表現せず、かつ「なり」「けり」のような歴史的意味を帯びた型をもっていなかったゆえに、中立的で自由な言文一致体の文末辞に適していたのである。この「である」の普及が、言文一致体の確立と普及に大きな意味をもっており、後の小学校の国定教科書も「である」を採用した。

むしろ、言文一致体の話しことばとは異なる要素は、「である」にとどまらない。従来の漢文・和文、さらには欧文の要素をも取り込んでいたのである。欧文の直訳から生じた新たな語法や、漢語の訳語によって吸収された多くの語彙も重要である(これに関して森岡一九九一参照・翻訳語に関しては、柳文一九八二を参照)。

小説における言文一致体も、先に述べた国語調査委員会の設置や小学校教科書における言文一致体の採用と同時期に確立される。山本正秀の調べでは、小説作品中に

言文一致体を採用した作品の占める割合が、一九〇五年には七八%だったが、徐々に上昇して、一九〇八年には一〇〇%となっている(山本、一九六五、五二)ここから、日本の近代文学の言語的な方向性は、漢文でもなく俗語でもない中間言語に向かっていることがわかる。

明治の文語文の文体は、江戸時代の多様な文体の要素、そして欧文の文体を吸収・総合したものである。文語文は、ただの俗語を写した文体もしくは漢文訓読体ではなく、両者の媒介役を果たせる言語変種なのである。それに話しことばの語法・語彙を加えて、いわば文語文からの「脱皮」によって、日本の「標準語」中間言語」は成立したのである。

3 言語スタンダードと国民国家形成問題

— 結び —

エジプトにおいては、唯一の「民衆話」なるものは、公認化されなかった。その原因は、言語学的な問題ではなく、政治的な問題であった。いわゆるアラブの傘のもとで、「アラブの大義」という半世紀余り続いてきた思想が、アラブ諸民族の統合を象徴した「アラブ・ナシヨ

ナリズム」イデオロギーは、この民衆語の存在とその進化を公認しなかった。社会主義に基づくナセル革命は、結局、自分のイデオロギーを正当化するため、西洋的な言語モデルを選択せずに、「東洋言語」としての、フスハーを復活することにした。その結果、エジプトの国語認識において、フスハーと、近代文学及びマスメディアに使われる「中間言語」、さらには一般大衆のアミーヤという諸変種が併存する言語内の「多元変種併用」状況に至った。日本においても、言文一致運動の成果としてつくりあげられた「中間言語」変種が国語化され、社会に承認されるのは容易ではなかったようだ。言語スタンダードという新しい変種の普及は、文体の未成熟という言語的な要因に帰することはできない。むしろ、文体の威信というイデオロギーの作用及び社会・政治的な条件を考慮すべきであろう。戦前の日本語の場合は文語と、それと平行してその下位に存在する俗語の關係は、依然として残っている。それに加えて、新しい言語型としての中間言語が作りだされたのである。このことは、第二次大戦までの日本は、天皇制や貴族制の存在にみられるように、社会の内部に階層性が制度的に温存されており、

国家の構成員すべてが制度上は平等であるという厳密な意味での国民国家ではなかったことと関係している。敗戦により「天皇制国家」が崩壊し、「国家」と「民衆」に関する社会的・政治的意識が変化した。それに伴い、文語文の使用に終止符がうたれた。戦後の憲法が、「中間言語」変種で書かれていたことは、象徴的である。以下の大日本帝国憲法の文(1)と日本国憲法書の文(2)を比較すれば、その言語的な違いが分かる

(1) 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外其ノ許

諾ナクシテ住所ニ侵入セラレ及搜索セラル、ノ
コトナシ

(2) 第十四条 すべて国民は、法の下に平等であつて、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により政治的、経済的又は社会的關係において、差別されない。……

現在、日本人の大部分をしめるようになった中間階層によって発展させられ、現在の「標準語」となるに至った「中間言語」変種は、共同体への帰属意識を必要とする国民国家の成立の条件なのである。しかし「中間言語」は、決して標準語以外の多様な地域的・階層的な変

種を消滅させるものではない。現在でもさまざまな変種が存在している。ただ、中間言語という変種が、学校、テレビ、新聞、マスメディアなど、といった、あらゆる社会的な言語要求に対応でき、社会の大部分の領域に普及し、それが「日本人」の一体性の想像に大きく貢献していることは間違いないのである。

以上、戦後のエジプト・日本両国の国語認識に依存する、中間言語の公認をめぐる、論じてきた。日本の場合は、戦後はどちらかと言えば話しことばに近い、中間言語が公認された。日本はたんなる俗語を書きことばに使用したのではなく、中国語に由来する古びた漢文を完全とは言えないが見捨て、中間言語としての標準語を見出したことによって、「脱亞入欧」できたのである。言文一致運動の結果として変身した日本語は、「同化思想主義」に成り立っている今日の日本国民国家を成立させる大前提であった。この「言語スタンダード」が「国語」として認識されたことによって、日本人は一つの言語共同体に帰属していると意識することが可能になった。すなわち、中間言語の存在こそ、日本人のアイデンティティを維持した絆だったと思われる。これと対照的にエ

ジプトにおいて、その「中間言語」は、結果的に公式に受け入れられなかった。現在のエジプトを初めとするアラブ世界は、日本のように公認された「言語スタンダード」の不在という現象に悩んでおり、アラブ世界における個人の持つ「複合アイデンティティ」と社会にみられる「文化の多元構造」の原因は、そこにあると思われる。以上、本稿では、「中間言語」をめぐる考察によって、エジプトと日本の「国語認識」と、その「方向性」を決定する言語改革の成功が、いかに政治と深く結びついているのかを、明らかにした。国語認識と、それによって実現される国民国家において機能する「中間言語」の仮説は、あらゆる言語改革の分析にも有効なアプローチだと思われる。

(本論を作成するにあたって、日本の言文一致に関しては、平野啓介氏(日本学術振興会特別研究員)に大きな教示を受けた。感謝の意を表したい。)

参考文献

- 山本、一九六五『近代文体発生の史的研究』岩波書店・一九七二『言文一致の歴史論考』桜楓社・一九七八『近代文体形成資料集 発生源』桜楓社・一九七九『近代文体形成

資料集成 成立篇』桜楓社

Aston, W. G. 1871. *Grammar of the Japanese Spoken Language*. Yokohama: Kelly & Walsh, Tokyo: The Hakubunsha, London: Trübner and Co.

イ・ヨンスク 一九九〇『森有礼と馬場辰猪の日本語論』『思想』七九五 四九一―六四頁

上田 一九〇三『内地雜居後に於ける語学問題』『國語のため 第二』富山房『言文一致につきて』『帝國文学』三ノ

七(雜報) 一九九七年(『近代文体形成資料集成 発生篇』)

塩澤 一九七六『明治期の口語文典』上智大学『國文学論集』

———— 一九七七『明治期の国定教科書』上智大学『國文学論集』

島村 一九八八『小説の文体に就て』『読売新聞』一九八八年五月(『近代文体形成資料集成 発生篇』)

島村 一九〇一『言文一致の現在 未来』『新文』一ノ六(『近代文体形成資料集成 成立篇』)

Baba, T. 1873. *Elementary Grammar of Japanese Language*. London: Trübner and Co.

平野 一九九四『近代化と國語改良運動』名古屋大学修士論文

福沢 一八六六『西洋事情』尚古堂

———— 一八九七『福沢全集緒言』山本正秀編『近代文体形成資料集成 発生篇』桜楓社 一九七八年

保科 一九〇二『國語調査委員會決議事項についで』『言語学雜誌』三〇一

前島 一九五五『鴻爪痕』前島倉

森岡編著 一九九一『近代語の成立 文体編』明治書院
文部省 一九〇二『國語調査委員會決議事項』『官報』五六

九九号(『近代文体形成資料集成 成立篇』)
柳父 一九八二『翻訳語成立事情』岩波書店

Saleh 一九九四『エジプトの言語ナシヨナリズム史』一橋大学単位取得論文

Yaqoup. 1878. *Ab. Nadarah*.

Nadyim. 1881. *A-Tankyit wa A-Tabkiit*
『Al-Jaridah』一九一三年 一九一三年四月(六号・二〇号・二三号・二七号・三〇号) 五月(一号・四号)

Nadyim. 1892-1893. *Al-Ustadh, al-Mahrusa*.
Azhar 1892-3. *Azhar Uni*.

Spitta. 1880. *Grammatik des Arabischen Vulgärdialectes von Aegypten*. J. C. Hinrichs'sche, Buchhandlung, Leipzig.

Willmore, Selden. 1901. *The spoken Arabic of Egypt*. London.

———— (一橋大学助手)